

本書では、二一の事例で六〇のかかわり方の工夫について紹介しました。どれも知っていて、思い出すことさえできれば使えるような小さな工夫です。ぜひ、ご自分の実践活動の中でご活用ください。

もちろん、ここで紹介した方法を使えば支援が必ずうまくいくという保障はありません。支援活動のアイデアは、やってみるまでうまくいくかどうかはわからないものです。また、ここで紹介した方法は、私にとって役に立った方法です。つまり、私という人間に合った方法だともいえます。みなさん、一人一人個性を持っています。ある人に合った方法が、別の人にも合うとは限りません。

それでもみなさんに使っていただくようお勧めするには、理由があります。

まず、六〇の工夫の中には、いくつか必ずやしつくりとくる工夫があることと思います。そして、使ってみて違和感を持ち、自分自身の中に「気づき」が生じるものもあると思います。その「気づき」は、その人自身のものです。その「気づき」こそが、次の実践の中で生きてくるのだと考えています。

最後になりましたが、本書を世に出すにあたり、今まで私に声をかけ、話しかけ、質問してくださったすべての方に感謝を申し上げます。

本書で紹介した数々の工夫は私の力で生まれてきたものではなく、すべて誰かが私に示唆し、伝え、教えてくださったものです。しかし、そのほとんどは、もともとの形で残っておりません。私が現場で苦労し、工夫し続ける間にこなれていって、今の形になりました。かつて私がいただいたものを、本書を通して次の誰かに渡していくことができるのだと思うと、本当にありがたいことだと感じております。

ほんの森出版の小林敏史氏には、大変お世話になりました。以前から『月刊学校教育相談』に掲載する原稿を何度も依頼してくださったことは、私の財産になりました。常に「書きたい」と思う企画をご提案いただけるので、それに触発されて私も自分の力以上のものを出すことができましたと感じております。

本書の企画も、声をかけていただいた瞬間から「書きたい」という気持ちを強くかき立てられる企画でした。この場を借りて深く感謝申し上げます。

二〇一六年一〇月

半田 一郎